

2011年6月23日／浪宏友ビジネス縁起観塾

さまざまな説法

資料：庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』（佼成出版社）「説法品」

1. 大莊嚴菩薩の第二の質問

迦牟尼世尊がいままで説いてきた教えと、いま説いてくださった無量義の教えのどこが違うから、無量義の教えを修めさえすれば、無上の悟りの境地に達することができるかと仰せになるのですか。

2. 釈迦牟尼世尊の答え

仏の説法とはたらきは不可思議なものであり、仏だけが知ることのできるものです。その仏の悟りを得るためには、無量義の教えを学び、身につけるしかないのです。

3. 釈迦牟尼世尊の今までの説法

(1) 「真実のすべて」はまだ明らかにしていない

- ① いままでは、人びとの境遇・機根・性質・欲望に応じて、それにふさわしい教えを説いてきました。
- ② このため真実のすべてを打ち明ける機会がなく、釈迦牟尼世尊が説法を初めてから四十余年間、究極の真理をすっかり説き明かすことなく過ごしてきたのです。

(2) 「水の譬え」の要旨

- ① 私たちは、汚れを洗い落とすのに水を使います。水でありさえすれば、どこの水でも汚れを洗い落とすことができます。
しかし、谷川、溝（用水路）、池、大海では、水の量や深さがちがいますし、それぞれの水のはたらきもちがいます。
- ② 釈迦牟尼世尊の教えも、同じです。どの教えでも心の垢を落とすことはできますが、初めの頃の教えと、中ごろの教えと、いま説く教えとは、まったく同一とはいえません。
- ③ 釈迦牟尼世尊は、その人の境遇、機根、性質、欲望に応じて適切な教えを説きます。それぞれ違った教えに見えますが、どの教えでも、心の垢を落とすことができるのです。

(3) 聞いた人の受け取り方の違い

- ① 「言葉が同じ」でも内容に違いがある
 - (a) 初めに説いた教えと、中頃説いた教えと、今ここで説く教えと、言葉は同じであっても、その内容に違いがあります。
 - (b) 内容に違いがあるから、人びとの受け取り方にも違いが生じます。
 - (c) 受け取り方に違いがあるから、その教えを聞いて得た悟りも違ってきます。

- ② 「同じ時に聞いた教え」でも受け取り方に違いがある
- (a) 同じ時に同じ教えを聞いたとしても、人によって受け取り方に違いが生じます。
 - (b) 受け取り方に違いが生じますから、得る悟りにも違いが生じます。

4. 無量義の教えを修めさえすれば、無上の悟りの境地に達する理由

(1) 真理

仏の説く真理は、ただ一つしかありません。

仏はその一つの真理を、人びとが心に求めるものごとに応じて、さまざまな説きかたをするのです。

(2) 仏の本体

仏の本体というのも、ただ一つです。

仏の一つの身が無数の身に変わり、そのひとつひとつの身がまた無数のはたらきの変化を示します。これが、仏というものの不可思議な境地なのです。

(3) 無量義

- ① 無上の悟りとは、「ただ一つの真理」、「ただ一つの仏の本体」を悟ることです。
- ② これらは、釈迦牟尼世尊の説法を聞いただけでは、頭でわかっても、しんそこからわかることはできません。
- ③ 無上の悟りを得るためには、どうしても、無量義（ただ一つの真理を、相手に応じ、場合に応じ、自由自在に説いて、相手を真理に導く）ということ、自分自身で深く観じ、身につけなければならないのです。
- ④ すなわち、自分自身が「仏の智慧とはたらき」すなわち「無量義」を深く学び、深く観じ、深く実践して身につければ、無上の悟りに達することができるのです。

5. 「頭でわかる」と「しんそこからわかる」

(1) 「頭でわかる」とは、「学んだ道理を理解できる」ということです。

道理を理解できた人は、人に解説したりすることができます。

しかし、道理を実践できるかどうか、実際に実践しているかどうかは、別問題です。

(2) 「しんそこからわかる」とは、

- ・道理を学んで理解する
- ・道理を実際に当てはめながらよく考えて理解する
- ・道理を実際に行って理解する

という、三つの理解をマスターして、道理の理解が全身全霊に行き渡り、道理が自然に実践できるようになった状態をいいます。

(3) 「道理が自然に行えるようになった状態」が、しんそこからわかった状態です。

ここまですると、身の振る舞い、言葉の振る舞い、心の振る舞いが、いつでも、どんな場合でも、自然に、道理にかなったものとなります。

このような状態になったとき、「悟った」と言えるのです。